第 49 号

2015年 3 月 19 日

会報

青山学院大学
日本文学会

（題字）湯池　孝先生

巻頭随筆

学生時代の京都から

日本文学科教授　高田　祐彦

学生時代に京都をぶらぶらした思い出から、少し研究に関わることを書いてみる。

学生時代は、時間もあってよく京都に出かけた。東京に住んでいたが、高校時代の友人が京都の大学に進んでいたこともあって、彼と遊びがてら、平安文学の舞台を肌で感じ取ろうと思ったのである。彼の下宿にとめてもらうので、連日彼と彼の友人たちから楽しくも過酷な（手厚い？）「歓迎の宴」を催され、明け方近くまで付き合わされるのであった。ひどいときには、京都御所の参観の日、前の晩から飲み過ぎて朝寝坊をしたために、あわててタクシーで駆けつけたこともあった（事前にハガキで申し込み、指定の日時に行かなければならない）。大学生にはタクシー代はこたえた。いくらだったか忘れたが、いま、手元の地図で距離を測ると、今の料金なら四五〇〇円くらいかかった勘定である。

年に二度ほど行くうちに、大学院生にもなると、次第に研究に関わる場所にも行くようになった。その一つとして、ここでは、岩倉の大雲寺をとりあげよう。『源氏物語』若紫巻で、光源氏が紫の上を見る場面が描かれる「北山」の「なにがし寺」は、古来、鞍馬寺のこととされていた。近代になって多くのモデルが提起され、その一つに岩倉の大雲寺説があった。都からの距離、地形や建物の位置など、現実の寺の地勢によく対応する説であった。

実際にこの目で確かめよう、と私が行った当時、大雲寺は荒れはてた寺になっていたが、なるほど、これはたしかに似ていると思った。しかし、そのことがかえって奇妙な違和感を生みだすこととなった。

物語にとって、作品の舞台は、現実そのままの空間ではありえない。作中人物の行為や心情を展開するのにふさわしい舞台を作者は用意するはずである。ましてや、人物が虚構である物語世界において、どうしてその空間だけが現実の空間と変わらない、などということがあろうか。なまじ、『源氏物語』の舞台として、現在の京都にも残る平安京の地名がいろいろ出てくるだけに、私たちはその「現実性」にいつしかとらわれてしまっているのではないか。虚構の作品には、そこでしか描けない空間が書かれているはずだ。

そんなふうに考えた私は、物語にとって「事実」や「現実」とは、あくまで作品に書かれた世界そのものにほかならない、という当たり前の結論に至った。いかに作品の「内」に作品の「外」の世界が生かされているとしても、それは「外」から「内」の存在になることによって変容し、単純にもとの「外」に戻すことはできない。文学研究の中心であるべき作品研究としては、「外」の力の誘惑に抗して「内」なる世界の何たるかを追究すべく、踏みとどまらなければならないのである。「なにがし寺」は、おそらく大雲寺をも含むさまざまな空間の複合体であって、それでこそ、はじめて作品「内」の存在として意味を持つ。場所でも人物でも、モデルを一つに同定しようとしたとき、作品形成の秘密を解く鍵は、失われてしまうのである。

作品の舞台に足を運ぶことが無意味だというのではない。むしろ、その逆である。作品の時代を追体験するにせよ、決定的な隔たりを感じるにせよ、そこに立つことによって、作品が今私たちの手元に残されていることに限りない愛着を感じるだろうからである。

研究余滴

戦争下の『萬葉集』

日本文学科教授　小川　靖彦

した。そして、日中戦争・太平洋戦争時には、『萬葉集』は「国民」の心を支える歌集となってゆきました。

『萬葉集』は政府と軍によって戦意高揚のために政治利用されました。しかし、それだけはでなく、戦争下を生きる人々の心の深いところにまで関わっていたのです。

『萬葉集』の近代

二〇一四年四月に、私は『万葉集と日本人』（角川選書）を上梓しました。平安時代から近代まで、『萬葉集』がどのように読み継がれてきたかを考察した本です。

考察を進める中で胸をしめつけられたのが、近代日本における『萬葉集』の受容でした。明治時代に〝『萬葉集』は日本人の祖先が、天皇から庶民に至るまで、素朴な心をありのままに強い調べで歌った「国民的歌集」〟とされまいたのが『萬葉集』です。穴沢さんは陸軍合格を伝える手紙で、喜びの中にも智恵子さんを想い揺れる心を大伴旅人の「ますらをと思へる吾や水茎の水城の上に涕拭はむ」（巻六・九六八）に託しました。

特攻隊に指名された穴沢さんを訪ねて詠んだ、来世での再会を希う智恵子さんの絶唱

わかれてもまたもあふべくおもほへば心充たされてわが恋かなし（来世への希ひ）

は、田辺福麻呂の歌「別れても復も逢ふべく思ほえば心乱れて吾恋ひめやも」（巻九・一八〇五）を踏まえたものです。

『註解萬葉集』

水口氏のご厚意で、穴沢さんが陸軍航空隊入隊の際に智恵子さんに贈った『萬葉集』を拝見する機会を得ました。

驚いたことに、それは佐野保太郎（高知高等学校長）・藤井寛『註解萬葉集』（藤井書店、一九四二、四三〈再版〉）でした。幕末の国学者鹿持雅澄の『萬葉集古義』の訓を本文に、全歌を一冊に収め、語義や訓の異同も注記する、A5判八五〇頁からなる専門性の高い本です。

この本には智恵子さんによると思われる赤鉛筆の印や、黒の万年筆の印と書き込みがあります（もちろん九六八番歌には濃い赤鉛筆の印があり、索引で一八〇五番歌の所を万年筆で二重に囲んでいます）。印の付けられた歌は、当時よく読まれた勇壮なものもありますが、その多くは〈待つ恋〉の歌です。

「自分の意志ではない人生」（『知覧からの手紙』）を生きる悲しみを、〈待つ恋〉の歌の嘆きと祈りに重ね合わせたのでしょう。

智恵子さんは二〇一三年に永眠されました。今、戦争下の『萬葉集』を見つめ直すことの大切さを痛切に感じています。

第49号　目　次

巻頭随筆　二
研究余滴　三
日本文学会春季大会　四
日文生随筆　五
研究記事　九
研究室探訪　一一
姫野カオルコさんの著書を読んで　一六
院生研究会記事　一七
私の博士論文　一九
日本文学特講A　二〇
二〇一四年度講義題目　二一
研究室だより・編集後記　二四

日本文学会春季大会

講演：田中ゆかり先生（日本大学文理学部教授）

「ドラマと方言―方言コスプレドラマができるまで―」

報告　二〇一三年度院卒　岡田　純子

二〇一四年六月二八日、日本文学会春季大会が開催され、講演会では日本大学文理学部教授田中ゆかり先生をお招きし、「ドラマと方言―方言コスプレドラマができるまで―」と題してご講演いただいた。

田中先生のご専門は社会言語学で、日本語という視点から日本語社会の現象を捉える研究をなさっている。今回のご講演では、創作物であるドラマ、主にＮＨＫ「連続テレビ小説」「大河ドラマ」に現れる「ドラマ方言」を通して、日本語社会における方言の価値や位置付けの変化、さらにその中で近年現れた「方言コスプレ」という新たな方言の機能についてお話しいただいた。

ドラマの登場人物が「～やねん」「～ごわす」「～だべ」と話したら、どの地域の、どのようなイメージを連想するだろうか。方言というと、一般的に現実の土地と結びついた言葉を思い浮かべるが、ドラマなど創作物に現れる方言はそのような「リアル方言」とは異なり、日本社会の人々が共有する方言らしさのイメージ、すなわち「方言ステレオタイプ」を基に、「リアル方言」を編集加工したもの、田中先生はこれを「ヴァーチャル方言」の一種であると述べる。ドラマ方言は、まず、共通語を基にアクセントや文末表現、自称詞によって「リアル方言」らしさを表現し、それによりドラマの舞台や登場人物の出身地を設定する働きを持つ。また、日本の方言、例えば関西方言には「おもしろい」、九州方言には「男らしい」、東北方言には「純朴だ」といったような「方言ステレオタイプ」が存在するが、ドラマ方言ではこれに基づいて、関西方言の話し手には「つっこみキャラ」、東北方言の話し手には「純朴キャラ」というように、人物のキャラクターを設定、演出する、いわゆる「方言コスプレ」が数多く見られると田中先生は指摘する。

方言ドラマが本格的に登場したのは、一九八〇年代以降ＮＨＫドラマで「方言指導」が導入され、ドラマ方言に本物らしさが追求されたことによるという。最近では、『カーネーション』の「岸和田ことば」や、『八重の桜』の「会津ことば」などさらに細分化された地域の方言が見られる。その背景として八〇年代以降、日本語社会において方言が個性として捉えられ、その価値が高まったことが大きく関係すると田中先生は分析する。このような方言認識の変化の中で、二〇一三年に放送された『あまちゃん』について、田中先生は新たな境地を開いた「方言コスプレ」ドラマであると位置づける。『あまちゃん』では、流行語にもなった「じぇじぇじぇ」をはじめ、ドラマのために造られた架空の町の「ヴァーチャル方言」が使用され、主人公「アキちゃん」は自分の故郷の方言ではない、その架空の「ヴァーチャル方言」を身に付けて「方言コスプレ」を行うことによって新たな自己を獲得する。つまり、これはドラマという虚構の中で、「ヴァーチャル方言」が虚構の中の虚構としてメタ的に使用される、新たな「方言コスプレ」ドラマであり、このようなドラマが日本社会において楽しんで受容される時代が来たことを意味すると田中先生は分析する。

講演中、馴染みのあるＮＨＫドラマや「ヴァーチャル方言」が次々と登場し、膨大なデータに基

づいた田中先生の研究への情熱と真摯な姿勢が垣間見られたとともに、今回の講演では、日本語の研究にとどまらず、日本語を通して現実の日本語社会を捉える社会言語学の面白さと研究意義を改めて実感させていただいた。

日文生随筆

大学院に進学して

博士前期課程1年　濱中　菜摘

まだ少し肌寒い弥生の空の下、桜の絞りの散る袴を着て友との別れを惜しんだこの表参道のキャンパスに、一週間と経たずにとんぼ返りして、早半年。大学院での生活は想像よりもはるかに刺激的でした。

私が大学院進学を意識したのは学部三年の夏のことです。私は教職を志していたのですが、再来年には自分が就職するのだということについて真面目に考えた時、自分の専門知識はあまりに浅すぎるのではないかと思ったことがきっかけでした。また、本格的な演習授業に刺激を受け、もっと勉強したいという気持ちがどんどん強くなっていたことも理由の一つでした。私が就職するものと信じて疑わなかった両親には勿論反対されたのですが、最終的にはもっと勉強したい、研究したいという一心で進学を決めました。

大学院の博士前期課程では原則として二年間で三十単位を取ることになっており、私は先輩方のすすめもあって今年は週に五つの授業を履修しています。授業数こそ少ないですが、少人数のゼミ形式での授業では常にレベルの高い議論が交わされ、知識量の少なさや頭の固さに気付かされることばかりです。特に、土方先生の前期ゼミで行われた「柳田国男と折口信夫の著作を読む」ゼミでは、自分が〝研究〟というものをいかに甘く捉えていたのか、と改めて考えさせられました。また、どの授業も少人数なので自分が発表する頻度も高く、常に何かしらの発表準備に追われていると言っても過言ではありません。授業の他にも、修士論文のための調査をしたり、先行研究の論文を読んだりと、研究室と図書館を往復して研究に励んでいます。授業内外で先輩方の研究について拝聴する機会も多く、その度に刺激を受けます。自身の未熟さに情けなくなることも多いですが、同時にもっともっと知りたい、学びたいと思える最高の環境だと思います。

現在、私は『源氏物語』を中心に、現代社会における古典文学の受容の問題について研究しています。先輩方の中には、『和泉式部日記』などの日記文学の研究をされている方や、『新古今和歌集』の古注釈書に関する研究をされている方、『簠簋抄』という注釈書の研究をされている方などもいらっしゃり、一口に「文学研究科」と言ってもその研究は多岐に渡っています。文学研究の世界は本当に広く深いのだと実感する毎日です。

日本文学科の学生で、卒業後院に進学するという進路を選択する人は稀です。周囲の人間が就職して社会に進出していく中で進学を決意するのは容易なことではないと思います。ですが、大学院には自分の興味関心・研究目標に真摯に向き合うことのできる最高の環境が整っています。私は周囲からの反対もありましたが、進学して良かったと心から思っています。もっと研究がしたいという気持ちがあるのなら、是非院進学を視野にいれることをおすすめいたします。文学研究の海に溺れた者同士、お互い精進しましょう。

私の就活体験記

4C　高森　理紗子

就活をして思うことは、たとえ第一希望でうまくいかなくても、前向きに根気よく続けることが大事だということです。色々な企業を見て、たくさんの人事の方と話していくと自分に合う企業が見つかります。

私は部活を三年の夏もきっちり続け、試合が一段落した秋から本格的に始めましたが、まわりの友達の言うＳＰＩ、インターンと言う聞きなれない言葉を聞くたびに焦ってはいましたが、なんとかなるだろうと思っていました。

憧れだった第一希望だった企業に落ち、そこから慌てて自分は卒業したらどんなことを仕事でしたいか真剣に考えました。そこで今まで自分がずっと頑張り続けてきた部活を直接ではないけれど、活かせる企業を選び、エントリーはその他にも幾つか出しましたが、面接や企業研究をそこに絞りました。正直このときは、まわりも決まり始めていて、早く私も終わらせたいという思いが一番でした。

しかしここからも波瀾万丈で、五月にある三次面接と茨城であった春の団体戦二日目の日程がかぶり、試合のスタート時間次第では急いで帰っても夕方の面接に間に合わないため、二日目に出場するかを一日目にずっと悩みました。なんとか間に合いそうだったので試合に出て、後輩に見送られながらリクルートスーツに着替え、面接会場で試合から帰ってきたことを話すと、とても驚かれました。企業研究は参考書やセミナーなどで、どのようにやるといいと様々なアドバイスを得られましたが、私は新聞に出ている企業の切り抜きを使いました。多くの有名な企業の取締役や社長本人がインタビューで語っていたり、今後の展開について詳しく載っているので、集めて面接の前に見直すことで、話が弾みました。その甲斐あってか、最終面接まで進むことができました。しっかり準備して伝えたいことを何度も練習しましたが、今までの大変だった時を思い出してしまい最後のほうは、ここもだめなのだろうか、とじわじわと思い始めてしまいました。けれどもここまで来られたのだから、最後まで言い残さずに帰ろうと思い、つっかえながらもしっかり答えました。

三日後から一週間で内定の人には電話がくる、と言われ四日後のお昼過ぎに電話がありました。着信履歴を記念にと思い、大事に消さずにとっておきましたが、先日間違って消してしまいました。就活では最初躓いても、自分にしかできないことを大事にしてくれて、活かせる企業を見つけることが一番大事だと思いました。

教育実習記

4C　仲村　レナ

六月中旬より三週間、母校の私立中学校にて教育実習を経験しました。球技大会という行事を目前に控えて生徒たちの活気も一層溢れる中、中学二年生の国語の授業とその担任を務めました。

緊張の面持ちで参加した初めての職員朝礼では、私が生徒だった時には全く知らなかった先生方の姿を目にしました。教育実習前から、教師は授業をすることだけが仕事ではないということを理解しているつもりでした。しかし、朝の十五分間という限られた時間においても、生徒間トラブルや提出物の管理、校務や出張など多種多様な業務についての情報交換が目まぐるしく行われており、教師という仕事の幅広さを身をもって認識することとなりました。職員朝礼に限らず、休み時間や担当授業のない時間にもあらゆる仕事をこなし、授業がよりよい学習の場になるような工夫も怠らない先生方から、教師という仕事に対して必要な責任感や覚悟を学び取りました。

教育実習の大半を占めた先生方の参観授業と自分自身の実習授業では、教師という視点から本格的に授業について考えることができたように思います。教壇に立つまでは、授業において教材をどう読解し何を考えてもらいたいかということばかり重視していました。しかし授業を通して、単元の導入や教材中の何気ない情報に関しても、具体例をあげたり資料や写真などを提示したりすることで、読解内容をより想像しやすくし、生徒にとって身近な物事として感じさせることができ、その教材への興味や関心を強めることに繋がるのだということを実感しました。

授業中には、予期せぬ事態が起きたり想定していなかった反応が返ってきたりすることもありました。その際、準備していた流れや答えに強引に結びつけるのではなく、脱線しかけた内容を授業の内容に関連付けたり、まず生徒の意見を聞いてクラスで共有しながら思考させたりしていく先生方の柔軟な対応には、尊敬の念を感じずにはいられませんでした。

私が三週間で経験したことは、

先生方の日常における一部でしかない上に、先生方の手を煩わせてしまったこともあったと思います。しかし、実習に行かなければ知り得なかったことが数多く、先生方や生徒たちに感謝の気持ちでいっぱいです。実習で学んだことを、これから社会人として生きていく中で必ず活かし、他の人のためにも生きることのできる人間になれるよう行動していきたいと思っています。

介護体験記

3C　糸永　晴子

正直、特別支援学校での介護体験をするにあたって、小学校の頃から医療・介護関係の仕事をしていた母の姿を見て育った私は介護とは「大変そう」「きつい」「忙しい」というイメージがありました。また、当然生徒にけがをさせないよう気を張っていなければならないという責任があり、体験の説明会からすでに気が重いなと感じていました。

体験の日には、まず車いすの押し方など体験中の諸注意を学校の方に説明していただき、それから教室へと向かいました。

私の向かったクラスは約十人の生徒に約四人の教員という構成で、ほぼ一人につきっきりで話しかけ、「コミュニケーション」を大切にするように指導されました。私はあるひとりの男の子と接しました。私は緊張していましたし、なんて声をかけたらいいのだろうと戸惑ってしまい、最初のうちはぎこちない接し方をしてしまいました。男の子は私の声には反応しますが声が出ませんし、返事がなく、「会話」をすることができませんでした。しかし、教員の方が男の子に「若いお姉さんで緊張しているのねえ！」と冗談を言ったり、他の生徒の様子を見て、「今日は機嫌がいいじゃないの。元気そうだし。」と声をかけていたりする姿を見て、「緊張しているのは私だけじゃなくて男の子もそうだ。もっと男の子の気持ちを知りたい！」と、気持ちに寄り添いたいという感情が芽生えました。また、教員の方は、生徒から返事がなくとも明らかに「会話」しているように私の眼には映ったのです。そしてなんとか教員の方々の接し方を見よう見まねで試み、何をするにも男の子に話しかけながら一緒にいる中で、「表情」がほんのわずかでしょうがわかるようになりました。「笑う」ことはありませんでしたが接しているうちに、男の子が「醸し出す雰囲気で笑っている」と感じることができました。

やはり、私よりも長く顔を合わせている教員の方々に対して、たったの二日だけの私よりも「信頼関係」というのでしょうか、男の子は心から安心したような様子を見せていました。それは長く顔を合わせているということではなくて、できなくて苦しいことをサポートしてくれているという事実が男の子の教員の方々に寄せる安心・信頼につながっている重要な点ではないかと考えました。

そして教員の方の生徒一人ひとりの身体の事について医者から教授してもらいながら勉強してよりよく過ごせるよう努力をしている姿を目の当たりにし、「一人ひとりを大切にする」姿勢はどうあるべきか深く考えさせられました。

介護体験を行えたことで私の教育に対する考えに広がりが持て、本当に貴重で良い体験でした。

留学生より

2D　朴　賢率

★出身地はどこですか？

韓国の大邱（テグ）というところです。ソウルではありません。よくわからないと思いますが、釜山から約１００ｋｍ離れたところです。ちなみに韓国で一番暑いところです。

★日本、青学の日文に来たきっかけは？

最初に日本語を始めたのは、小学生のときでした。はじめは映像に字幕がなくて字幕なしでも見ようとしましたが、時間が過ぎて面白さを感じ、本格的に本を買って勉強しました。しかし、韓国で日本語を勉強することはあまりにも物足りないと思って日本に行こう

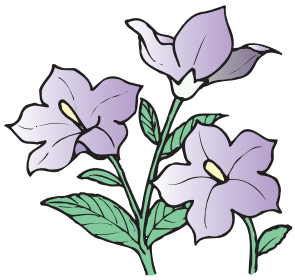
と思いました。
また、私が使っている日本語についてもっと勉強したいと思って日本文学科に入りました。

★特に興味を持っているものは？

特に興味を持っているのは翻訳と方言です。
翻訳は、韓国語ではこう表現しているのに日本語ではどう表現しているのかが面白くて勉強しています。また、韓国で日本語を主にドラマやアニメの字幕で勉強したので、字幕を作った人と私の訳を比較することも興味があります。
方言は、私が韓国語の方言を使うこともありますが、そこしか通じないという言葉に魅力を感じて興味があります。また、私が使っている方言と日本語が似ているので、方言と日本語がどう違うのかについても方言ユーザーとしての興味も持っています。
（現在韓国語の標準語にはあまりありませんが、韓国の南部方言の場合は日本語のように音の高さが存在するので、その点では似ています。
例：2とEを読むときは「イー」で発音自体は同じですが、東南方言では音が違います）

★日本で学んで将来どのように生かしたいですか？

元々は翻訳者や通訳者を目指して日本に来ましたが、日本語のほうがもっと面白いので、今は日本語研究者を目指しています。日韓翻訳や通訳、また日本語と韓国語を比較した研究をしたいです。韓国語ではこうやっているのに日本語では韓国語とは似ているけど違うといった感じを韓国や日本に紹介したいと思います。



日本文学科とキャンパスの思い出

「青山学院」にいること

一九九九年度卒　吉成　大輔

私が大学院を出て高等部に就職してから早六年が経とうとしている。その間、大学にも高等部にも大きな変化があった。
高等部は六年半を費やした新校舎建築が完了した。大学のものを使わせていただいていた各種施設も自前のものとなり、特に大学学食とほぼ同じメニューが供されるカフェテリアは、我々教員もありがたく使わせていただいている。
大学は理工学部、社会情報学部（来年度からは地球社会共生学部も）を除く学部の一、二年生が初年度から青山キャンパスに通うようになり、それにあわせてタワー型の新校舎が建設された。今まで三年生にならないと再会することがなかった大勢の卒業生と、新年度になってすぐ顔を合わせることとなり、嬉しいやら気恥ずかしいやら複雑な気分である。
一方、母校が随分遠い存在になってしまったという思いは年々強まってきている。こう述べると青山学院から離れて生活されている方々からは意外に思われるかもしれない。事実、私が卒業後も青学とつながり続けていることへのうらやましさを口にする友人は少なくない。私自身、青山学院に就職することが大きな決め手であった。
が、この感覚はむしろ、母校に就職したからこそはっきり感じうるものなのだろう。常に目の前にあるからこそ、そこに自分の友人や学生生活が存在しないことを痛感させられるのである。
そこには寂しさが少なからず存在するが、そこまで愛惜し得る良き思い出を青山学院が与えてくれたということでもある。今私がすべきことは、現在学んでいる人々にとって青山学院がそのような場であり続けるよう、微力ながら働

き続けることだけである。
それでも日常の隙間で感傷にとらわれそうになったら、それを肴に（同じ感覚をお持ちかもしれない）恩師の片山先生と一献酌み交わし、しばし時を忘れることができればと思っている。

研究記事

「ある一人の少女の戦争」

4D　藤井　香葉子

私は、終戦時に小学校六年生だった祖母の戦争体験、そしてその後について書きたいと思います。

祖母は昭和九（一九三四）年に横浜に生まれ、兄弟姉妹が七人と多かったため、祖母のみ他の親戚の下で約八歳まで他の兄弟と別に育ちました。小学校四年生までは通常に授業が行われていましたが、五年生になる頃には学童疎開をしなければなりませんでした。小学三年生だった弟と共に足柄上郡山北の寺に学童疎開したものの、食糧不足で痩せ細った弟を母が見かねて、四ヶ月後には綱島（横浜市港北区）の知人宅に縁故疎開をさせてもらいました。

昭和二十年五月二九日に横浜大空襲が起こりました。綱島にいた祖母たちも別の知人宅に身を寄せていた他の家族たちも無事でしたが、祖母が幼いころ育ててくれた親戚の方は自宅近くの防空壕の中で煙に巻かれて亡くなりました。大空襲の後、他の家族のいる星川（横浜市保土ヶ谷区）へ祖母と弟は父の迎えで移動しました。歩いて移動する中で町は焼野原となっていて、その光景に呆然としたと祖母は言います。その後本当の食糧不足に苦しめられ、祖母はついに栄養失調で動けなくなりました。リヤカーに乗せられ、医者にも見せてもらっても薬も食料もない状況ではどうすることも出来ませんでした。ただ「黒蜜を塗ったパンが食べたい」と強く思っていたことを覚えていると言います。しかし口に出すことはありませんでした。憲兵が恐かったことと町の至る所に「欲しがりません勝つまでは」と貼ってあったからだそうです。そんな食糧不足の中で祖母と家族は何とか生き抜いて終戦を迎えました。

いつとは正確には言っていませんでしたが、祖母が話してくれた戦争の記憶は次のようです。

・「海ゆかば」（大伴家持作歌・信時潔作曲）は歌はなかったが、ラジオで流れていた。夜ラジオの前に家族全員で正座して戦争の報道を聞き、日本は勝っているのだと思った。

・米軍戦闘機に銃撃されたことがある。近くの川で弟や近所の子どもたちとザリガニ釣りをして遊んでいた時に米軍戦闘機が急降下してきた。慌てて防空壕に走った時に自分は一番後ろを走っていて、その時に戦闘機の米兵の顔がはっきりと見えた。楽しんでいるようなニヤッとした顔をしていて、その時は初めて見るアメリカ人の顔に鼻がすごい高いんだなと思った。防空壕に入るのが間に合って難を逃れたが、防空壕の手前一m付近が銃撃されていた。

戦後数年も食糧不足は深刻で、野草を食べたり、千葉の方の農家まで行き、着物などと食料を交換していました。ただ警察に見つかると没収されてしまうので、気を付けなければなりませんでした。配給は米軍で余ったようなチーズの塊などで食べ方もわからず、たいして足しにはなりませんでした。しかし、そうしてわずかな食料を得ながら戦後を生きました。祖母は中学を卒業後公務員になり、二一歳の時に祖父と結婚しました。嫁として家事をこなしながら公務員として働き、私の母や叔父たちを保育園などないような状況で育て上げました。

祖母の話を聞いて、現代の私たちが初めからあったかのように思っている法律も、保育園や教育も、社会的権利も何もなかったのだと改めて感じました。まだ女性の地位が低い中で子育てをしながら働き、その中で自分たちが働くために必要な権利を訴えて獲得し、姑の嫁いびりにも耐えながら生活をしていた祖母。祖母は私に昔の話をしながら「一度家に帰る途中に辛すぎて電車に飛び込もうとしたことがある。結局思いとどまったのだけど、虫の知らせか、

実母が夜遅くに私の安否を嫁ぎ先に尋ねに来たの。不思議でしょ。」と話してくれました。その時に祖母の人生においては、戦後も祖母の戦いは終わっていなかったのだと思いました。

祖母は私が幼いころから何度も「小学校の勉強が抜けている」ことを気にして、口にしていました。その姿はあの時代に勉強も含め、したいことが出来なかった人々の姿を表しているようでした。日中戦争に始まるたった八年間の戦争の時代に命だけでなく、多くを失っていたのだと感じました。

※この研究報告は二〇一三年度後期の講義「戦争と萬葉集」で提出したレポートに基づいています。

中国朝鮮族と言葉

2D　金　蘭

中国には五六の民族が存在し、その中で一番多く占めている漢族の他に五五は少数民族で、それぞれ独自の風習・歴史・言葉を持ち、一般に知られている「中国人」とはまた違う魅力を持っている。

朝鮮族は二〇一〇年現在、人口一八三万人、少数民族の中で十四位を占め、主に遼寧省・吉林省・黒竜江省の東北三省に集中している。朝鮮族は朝鮮半島から移住してきた民族で、中国国籍を持つ中国人である。移住説については様々な説があるが、今の朝鮮族と直接な関係があるのは一九一〇年日本が朝鮮を植民地として支配したことによる移住で、その時移住した人たちが今の朝鮮族一世であると思われる。

中国では民族区域自治制度により、少数民族が集住している地方は地域自治の実施が保証されている。自治地域の人口・分布地域面積により、自治区・自治州・自治県に分かれるが、朝鮮族自治地域中、現在一番大きいのは延辺朝鮮族自治州（別称延辺州、延辺）である。吉林省東部の国境の近くにあり、人口約二一七万人、半分以上は漢族で、朝鮮族は約三九％を占めている。

延辺では朝鮮語も漢語も公用語であり、町中、看板を含めあらゆるところで二つの言葉が同時に使われるのを見かける。学校教育でも朝鮮族学校と漢族学校の二つに分けている。延辺の朝鮮族学校は小学校から高校まで約一五〇ヶ所あり、朝鮮族学校では漢語の科目以外は全部朝鮮語で行っている。また、使っているテキストも朝鮮語の科目以外は漢族学校と同じ内容であるが、全部朝鮮語に訳したものである。反面、延辺の漢族学校では朝鮮語の授業がないため、子供に朝鮮語を学ばせようとする漢族の家庭では朝鮮族学校に通わせる場合も多くある。

延辺の朝鮮語は咸鏡道（함경도）方言を基盤としているそうだが、中国とロシアと北朝鮮の国境地帯にある地理位置と歴史関係によって、現在の朝鮮語は大分変わり、中には大量の漢語が取り入れられ、標準語になっている。また、標準語ではないが、ロシア語、日本語の要素もかなり残っている。私自身もよく使っているのはロシア語からみると、ミシンは마선（マソン←マシーナ）、マッチは비짓케（ビジッケ←スピーチカ）など、日本語からみると、お皿を사래（サレ←サラ）、お弁当は벤또（ベント）、上着は와기（ワギ）などある。

朝鮮族に対しては中国に住んでいる以上、漢語は必要な言語であり、朝鮮語は代々守ってきた母語である。外では漢語、家の中では朝鮮語というふうに二つの言語を同時に使っている中で、いつの間にか互いに混ざっているのかもしれない。私自身も二つの違いをあまり意識したことがない。場所と人によって自然と出てくるもので、何語を使ったのかは覚えない。たとえ、夢の中であっても、漢語か朝鮮語か、どの言葉を使っているかを意識せず、ただ自分の意思を伝えるだけである。

まだ中国には延辺以外の地域も朝鮮族はいっぱいいる。似ているような歴史を持ちながら、彼らはまた違う方言を使い、違う環境の中で、私も知らないもっと違う文化を築いているのかもしれない。これからも朝鮮族は様々の文化の中で変化して行くと思うが、どこにいても自身を忘れず自分の文化を守って行きたい。

参考文献　大村益夫『中国朝鮮族文学の歴史と展開』（緑蔭書房、二〇〇三年）

研究室探訪

片山先生編

2A　石原　玲奈

今回は普段入ることが中々ない研究室にお邪魔してみました。

★こんにちは。早速ですが、先生は研究室に週にどのくらいいらっしゃいますか？

週に三、四日。忙しくなれば五日ですね。

★この研究室だけで何冊くらい本があるのでしょうか？

はてな…1400、1500冊かな。大小とりまぜて。

★なるほど。この中で特に思い入れのある本はありますか？

うーん、自分が学生時代ゼミ発表した時に使ったのが…。森鴎外の歴史小説がゼミでそれで鴎外が使ったと思われる歴史小説の原資料を、はじめは図書館で借りてたのをどうしてもずっと手元に置く必要があるなあと思って買いました。今はしまっちゃったかな。卒論も森鴎外の歴史小説だったんですよ。それ以外にもいろいろ関係資料に手を伸ばしていくうちにこういう講談速記本を大学院の一年生か二年生の頃になけなしのお金をはたいて買いました（写真下）。デパートの古書店会に朝一で行っておさえて。でも仕送り残額がガクッと減って月末は苦しかったですね。苦労して買ったものは今でも覚えていますよ。

★今一番力を入れている研究は何ですか？

目下は戦時下の資料と、作家の日記を集めています。今特講で戦時下に書かれた菊池寛の随筆をやってますけど、同じ時期に複数の作家がどんな生活をしていたのか知りたいんですよ。空襲があった日でも、ある作家はそのことを大変ショックだと書く、けれど別の作家は全くそれに触れてない、今日はどこそこへ行って大根を掘ってきたとか――。

作家や作品の歴史的背景を調べるときは、〈大きな歴史小さな歴史〉ってよく言うんですが、大きな歴史っていうのは年表とか百科事典にのるようなノモンハン事件とか柳条湖事件とか、台湾出兵といった、文字通りの歴史的大事件。だけど本当にその時日本中のあらゆる人々がその事件に対して同じような緊迫した気持で受けとめていたのかどうか。それこそサリン事件や3・11は大きな歴史です。けれども直接被害にあわなかった大多数の人のその日の生活。それは小さな歴史ですよね。個人の歴史というか。それもまた個々人にとっては真実というか事実ですよね。だから作家の伝記的背景とか作品の成立事情を調べるときには、できるだけ大きい歴史と小さい歴史を重ね合わせて読もうと心がけています。それで今は日記を集中して集めているんです。まだ読んでないものもありますけれど。

★この研究室の便利なところ、不便なところはありますか？

便利なところは、集中して仕事ができること。図書館や日文研が

近くだからすぐ調べものもできるし。後は家にいるときの煩わしさから逃れられるし。研究環境としてはとってもいいですよ。

不便なのは、研究室のせいではないけれど、このまま蔵書がどんどん増えていっていっぱいになったらどうするかっていうこと。他の先生もそうだと思うけれど。キャパの問題がありますね。

総研ビルについていえば学生のみんなもそう思っていると思うけれど、エレベーターが二基しかないっていうのがね。

★3・11の時はどうでしたか？

あの時は居合わせなかったんですが、両側の本棚のうちの片側が全部倒れて。その時体調を崩していて力仕事ができないなと思っていたらその時主任の佐伯先生と大屋先生と副手さんたちが現状に戻してくれておいて助かりました。感謝いたしております。私はその時、多磨霊園に菊池寛のお墓参りに行ってたんですよ。だから本の下敷きにならずにすんだのは菊池寛に助けられたのかもしれないですね。もっとも、その時石塔が倒れてきていたらって考えると分からないけれども。

★書斎と研究室はどちらが居心地がいいですか？また、どんな研究室が理想ですか？

やっぱり集中できるので研究室がいいですね。家だとぐだぐだして今日もまた日が暮れた…って。ここから家までが20分くらいだったら申し分ないんですが…。というのは贅沢だな。この研究室のおかげでたくさんの勉強ができました。履修生が少ないときはここでゼミをやったりしましたが、今はもう人数が多いので教室でやってます。ここだとコミュニケーションがとりやすい利点があるんですが。今は私の個々の学生のゼミ発表相談や卒論の口頭試問で使います。

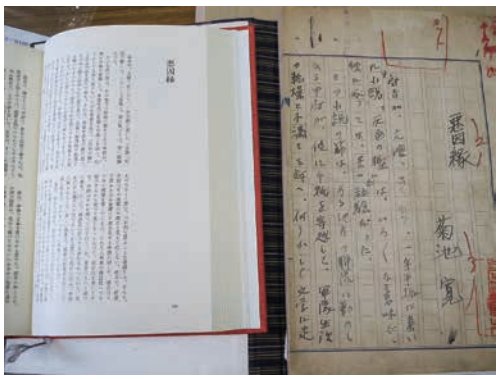
★最後に学生に向けてメッセージをお願いします。

図書館もそうだし、日文研もそうなんですが、大いに利用してくださいっていうことですね。ゼミ発表や卒論提出間際になって、あっ、こんないい本があるんだ、って気がつく学生がよくいるので、手掛かりがないときは先生に相談し、そして適当なツールを早く見つける癖をつけてほしいですね。そこから自力走行できるはずだから。

個々の研究室に関して言えば、図書館や日文研にないような資料をどの先生もお持ちのはずだから、閲覧させてもらえるかもしれない。研究室をもっと利用しましょう。敷居が高くてノックがしづらいかもしれないけれど、私としては、是非、来て、大学生らしい雰囲気を味わってほしいですね。勉強に関しての訪問ならどの先生も大歓迎だと思いますよ。

【写真下】

・菊池寛『悪因縁』の直筆原稿。高価だったので奥様の反応が気になったそうです。ご要望があればお見せします、とのことです。



近藤先生編

1C　関能　礼

★早速ですが、先生は研究室にどのくらいらっしゃるのですか？

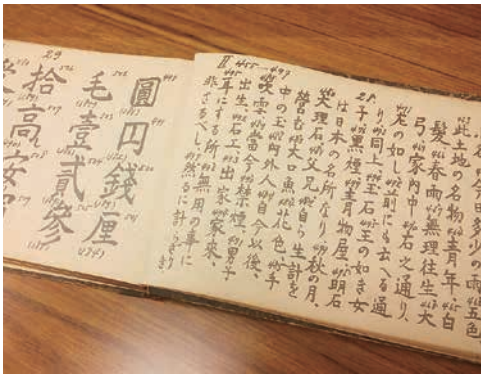
月曜日以外います。

★大体何冊くらいの本があるのでしょうか？

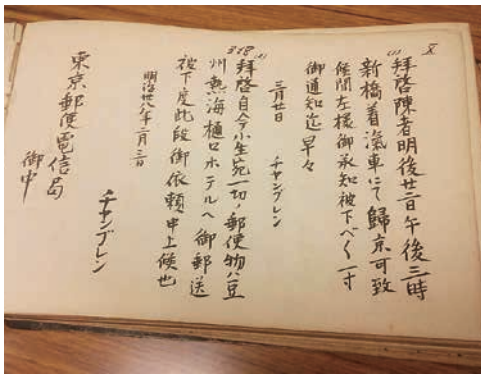
およそ1000冊あります。

★この中で思い入れのある本、入手が難しかった本はありますか？

入手が困難（珍しい）本はチェンバレンの『文字のしるべ』です。チェンバレンが日本で出版した日本語の教科書をロシアで複製したもので、現存するのは恐らく世界で一冊です。神田の古書市で購入しました。



思い入れのある本は三省堂の国語辞典（現在の新明解）。11歳の時に家庭教師の方が「辞書はちゃんとしたものを」ということで選んだ一冊です。



★現在力を入れている研究、長年のテーマはなんですか？

現在力を入れているのは言語リソースの研究です。古代日本から今日まで続いてきた日本の文化の概念の源泉について研究しています。長年の研究テーマは係り結びの研究です。大学の卒業論文も係り結びをテーマとしました。

★この研究室の便利なこと、不便なことはありますか？

便利な点はパソコンがたくさんあることです。不便な点は夜冷房が切れてしまうこと。パソコンがたくさんあるせいで熱が蓄積されてしまいます。

★3・11の地震の時はどうでしたか？

地震の時は全く平気でした。場所にもよるらしいですが、本をびっしりつめていたこともあります。

★なぜこの研究を志されたのですか？

中学・高校で国語が好きだったからです。

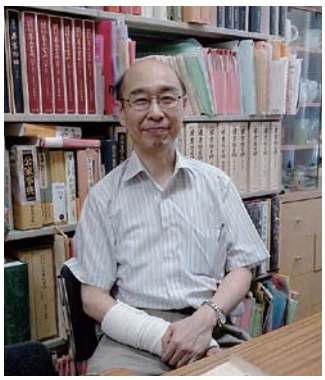
★最後に、学生に向けて何かメッセージをお願いします。

日本語学はとっつきにくいところもありますが、日常で使っているものなので、身近なものに置き換えてみれば面白いものです。

ありがとうございました。

佐伯先生編

２Ａ　加古真理奈
２Ａ　清水　咲



★早速ですが、先生は研究室に一週間のうちにどのくらいいらっしゃるのですか？

　大学の教員っていうのは、他の大学に非常勤で行っていることもあるし、出版社に行っていることもあるし、研究所に行っていることもあるし、国会図書館で自分の調べものをしている時もあるので、授業時間外の時には必ずしも大学にいるわけではないんですね。私の場合は週に3～4日、大学に来ていますが、この部屋にずっといるわけではないんです。ですから、ゼミの学生やなんかには、メールでアポイント取ってから来てねと言っています。いきなり来られても研究室にはいないかもしれません。

★この研究室には大体何冊くらいの本があるのでしょうか？

　ふだん、冊数で本を数える習慣がないので…。棚で6本なんだよね。僕ら本棚何本分とか言っちゃうんで。冊数にするとどれくらいだろう。１５００…そんなもんかな。よくわかんないけど。

★この中で思い入れのある本、入手するのが難しかった本などはありますか？

　色んなのがあるんですけど、本と言ってもね、これは和本なんですけど、珍しいものなんですよね。本というよりは、もとは本だった断簡なんですよね。相模川っていう作品の…御伽草子ですね。卒業生の古本屋から買ったんですけどね。

　全体としては、僕はここ（研究室）でよく学外の人と平家物語の研究会をやるので、それに必要なものは一通りありますよ、ここでいつでも平家物語の研究会をできますよという風にはしているつもりです。その辺は特色があるかもしれませんね。それはちょっと自慢かな。最低限の調べものはここだけでできます。

★今一番力を入れている最新の研究テーマはなんですか。また、長年のテーマはなんですか。

　平家物語の研究をずっと中心にやってきています。中でも、平家物語の延慶本という非常に重視されている本があるのですが、その注釈書が全くなかったので、青山学院大学に来てからすぐに、学内外の人を集めて、20年以上研究会を開いて注釈書を作っています。今ではやっと、12巻中の8巻まで完成して出版できています。しかし、定年までに残り4巻を作らなければと思っています。これは、ずっと続けているしこれからも続けていきたいと思っていることです。

　このことと全く別のことをやっているわけではないのですが、比較的最近のテーマとしては、２００４年に出た『戦場の精神史―武士道という幻影―』にも書いてあるのですが、現在では、武士道というような概念で、日本の武士が通俗的に語られることが多いですが、それは間違っていてとんでもないフィクションを含んでいます。日本人が戦争のことをどう考えてきたかを、軍記物語研究者は考えなければならないと思いま

す。早稲田大学の教授にも、これまでの軍記研究には哲学が欠けていたとおっしゃった方がいましたが、その人はその反省に基づく研究を十分に形にできないまま亡くなられてしまいました。自分はもっと広く戦争と文学といった感じで時代を超えた研究をしたいと思い続けています。

そもそも軍記物語という概念は、明治期に作られた仮の姿にしかすぎません。研究上の概念というものは、例えば王朝物語という括りにせよ私小説という括りにせよ、同じようなことで、こういうと都合よく括れますよと、たまたま誰かが作っただけなのです。便利だから使っているだけで、別にこの概念を使わなくても構わないし、むしろあまり縛られてはいけないと思っています。軍記物語という概念に縛られると、日本の戦争の文学はそれだけだという意識になってしまうけれども、それだけではなくもっと広くいろいろな所に戦争と文学の関係はあるわけです。つまり、いろいろな方向から考えなければいけない。中世だけではなく、例えば比較的平和であった江戸時代にも、戦争を扱った文学はたくさんあります。それらが、現代にどうつながっていくのか、その当時実際に何を考えていたのか、そういったいわゆる文学研究とは少し違った、人間がなにを考えてきたのかといったことを研究しています。戦争と文学という枠組みで考えれば、もっといろいろな視点が出て来得るはずだと考えています。

★この研究室の便利なところ、不便なところはなんですか。

便利なところは、ギリギリ12人まではゼミや研究会ができるというところです。特に、平家物語関係や中世文学関係で卒論でよく使う本がかなりあります。不便なところは、狭いところです。先ほど12人までなら座れると言いましたが、若い元気な人が集まると夏は本当に暑いです。どこの研究室でもそれは同じ事だと思うのですが、この研究室では本棚を左右の壁に置いているため、よけい狭いです。地震の時危険なので、大きい本は上の方には置かないようにしています。

★3・11の地震の際、研究室はどうでしたか。

横にして積んであった本は飛び出しました。立ててあった本は飛び出しはしなかったですが、本棚の天板の上に置いていたものはだいぶ落ちてしまいました。悲惨だったのは、食器棚の中身が結構落ちていたことです。食器棚自体が倒れて斜めになっていて、食器が割れていました。

★学生に向けてのメッセージをお願いします。

日本文学科の勉強というのは、とにかく自分で調べなければならないですよね。そのために図書館も合同研究室もあるわけですけれども、特に相模原キャンパスから文系が撤退して、青山キャンパスに4学年ということになってくると、如何せん合同研究室は狭いわけです。かなりよくできた合同研究室だとは思っていますが、不足を先生方の研究室で補うこともあるかもしれません。また、日本文学科は他の学科よりも先生と学生がフレンドリーに付き合っている学科だと思います。それは良い所だと思っているので、ぜひ先生方の研究室を積極的に覗いてください。ほんとうは覗かれたくない時もあるかもしれませんが、日文の先生方はフレンドリーで熱心な人が多いので訪ねていって嫌な顔をされることはないと思います。本を使うという意味でも、ゼミの学生に限ったことではありますが、合同研究室の延長のようにここで勉強しても良いと思いますし、積極的に先生を訪ねて自分の勉強に活かしてもらえると良いと思います。

・研究室には本だけでなく、こんなものもあるのだ。

（卒業生自作の貝合せ）

姫野カオルコさんの著書を読んで

★　日文の卒業生である姫野カオルコさんが『昭和の犬』で第一五〇回直木賞を受賞された。ここに改めて姫野ワールドの一端を紹介したい。

『昭和の犬』（幻冬舎　二〇一三初版）

1A　矢野くるみ

「香良市は、紫口市から馬車で五十四分のところにある。明治に計った時間ではない。昭和に計った。」青山学院大学日本文学科の卒業生である姫野カオルコさんの著書『昭和の犬』は、このようなんとも独特な書き口ではじまる。主人公の柏木イクが生まれた昭和三十三年から、イクが四十九歳になった平成十九年まで、その時どきに一緒に過ごした犬たち（ときどき猫）と触れ合う彼女の半生を描いた物語だ。イクは幼い頃から自分の思っていることをうまく相手に伝えることができない少女だ。そんな彼女が心を素直に開いたのが飼っている犬や猫である。日々の鬱憤やらを受け止めてくれる人がいないから犬にそれらをひたすら吐露しているような話なのだろうかと読み進めていくと、そうではなかった。彼女は、ささいなことで突然癇癪を起こす父や結婚に絶望した母、自分の置かれた周囲の環境を恨む事なく、受け入れている。父母のいる地元から抜け出して東京へきてからも、イクはいろんな犬たちと出会う。こころの中のもやもやがすべて晴れるわけではないけれど、イクは犬と触れ合って温かい気持ちになっているのだ。中年になったイクは自分も病気になりながら、母の介護をしている。そんな中、自分が幼い頃飼っていた犬とそっくりな犬に出会って、自分の人生は恵まれていたと半生をふりかえる。複雑な思いを抱えながらも、彼女にとっていろんな人々と犬たちと過ごした昭和の時代は美しかったのだろう。私は昭和の時間を過ごした事がないけれど、ノスタルジックな雰囲気のただようこの物語を読み終わった今、懐かしさに似た気持ちでほっこりしている。日本文学科の生徒でまだこの本を読んだ事のない人はぜひ読んでいただきたい。

『リアルシンデレラ』（光文社　二〇一二初版）

3B　今井　悠有

長野の旅館に生まれた、倉島泉という女性。『リアル・シンデレラ』は彼女について周りの人々が語る、ドキュメンタリーのような物語である。文庫版の帯には「現実を生きるシンデレラはこんなに幸せで、こんなに切ない！」という文があるが、読んでみると、この文について違和感が沸いてくる。泉は「シンデレラ」ではないし、「シンデレラ」にはなれていないからだ。彼女は報われないのだ。

ある女性は、「あまりに泉さんじゃない人にばかり都合がよすぎる」と言う。あらゆる場面において、それはその通りである。逆に言うならば、「泉にばかり都合が悪すぎる」のだ。泉はいつも妹の深芳と比べられていた。両親は体の弱くきれいな深芳にオルガンを買って習わせ、泉にはオルガンの箱しか与えない。懇意にし、親同士が縁談を組もうとしていた良家の息子は深芳と駆け落ちをした。なのに泉は嫉妬するでもなく、悲しむでもなく、いつも病弱な深芳を案じた。また、夫は旅館の仲居のアルバイトの女性と恋仲になり離婚を決意する。けれども、彼女は特につらい様子もなく、あっさりと承諾した。離婚の際に泉が求めたのは、自分が手入れしている畑を引き続き使うこと、旅館の収益の一部を月謝として受け取ること、などわずかなことである。周りの人々はそれに驚いて、薄気味悪く思い、いろいろな勘繰りをする。なぜこんな状態で泉は清らかでいられるのか、人々は不安なのである。不安なのは私もそうだ。実際、読みながら何度となく泉に怒りが沸くことがあった。泉はなぜ怒らないでいられるのか。妹ばかりが新しい服を買ってもらえて、悔しくないのか。痴女と言われて、侮辱されたと思わないのか。そう考えると、私も泉が怖い

ような気持になる。童話の「シンデレラ」についても、そう思えてくる。苛めても苛めても歯向かったりしないシンデレラが、継母や継姉は怖かったのかもしれないと。だからなおさら抑圧することしかできなかったのではないかと。《自分の周りにいる自分じゃない人にいいことがあったら、自分もうれしくなれるようにしてください》願いを叶えると言われて、少女の泉はこう願ったそうだ。そして大人になってそのことを、朴訥な方言でこう振り返る。《えへへ。我ながら名案だったずら。他の人のラッキーポイントも自分のポイントカードに加算されるずら》。泉は報われないのに、満ち足りている。幸せとはいったい何なのだろうか、私はこの物語を読んで考えさせられた。倉島泉という人は、関わったすべての人にそして私にこの問いを投げかけて、消えてしまったのである。けれど泉と親しくなったある男は、哀しみに涙することはない。それは、「月のように清かに、星のようにまたたく千尋の幸福を」、泉に見たからである。

院生研究会記事

青山日文院生研究会が二〇一四年十二月六日を以て最終回を迎えた。同会は本学日本文学・日本語専攻の院生が中心になって運営するもので、参加者が各自の専門の枠を超えて研究成果を発表し合う会として二〇一一年に設立された。最終回では、以下の五名による研究発表が行われた。

◇杉山和也（本学文学研究科博士後期課程）：

「近代日本に於ける〈国文学〉研究の黎明とカール・フローレンツ」

◇加藤秀雄（国立歴史民俗博物館機関研究員）：

「高木敏雄―南方熊楠往復書簡の研究　～民俗学の発生をめぐる一考察」

◇Matthieu Felt（コロンビア大学大学院東アジア言語・文化研究科博士後期課程）：

「テクストとパラテクスト　―『日本紀竟宴和歌』と『日本書紀私記』から見る『日本書紀』の享受史」

◇網倉勲（本学文学研究科修了生）：

「水上瀧太郎の『三田文學』―雑誌復活の経緯と研究の視点―」

◇工藤健一（本学非常勤講師）：

「開発をめぐる言説　―歴史学で「自然」を扱うために―」

発表の概要をそれぞれ紹介すると、一人目の発表者の杉山は近代的な学問としての「国文学」が樹立された経緯について再検討を行った。「国文学」が樹立は、ドイツ文献学（フィロロギー）を導入した芳賀矢一によって成されたものと捉えるのが通例となっているが、この把握は必ずしも適切ではないとした。芳賀は、東京帝国大学講師の文献学者カール・フローレンツ（Karl Florenz）の影響を多分に受けており、彼の存在が大きく拘わっていたとする。フローレンツの影響は芳賀の他にも高木敏雄、久松潜一、津田左右吉等に認められるとし、一九世紀の在日欧米研究者達の研究を改めて見直しつつ、国文学研究史そのものを再検討することの必要性を訴えた。

続いて二人目の発表者の加藤氏は、南方熊楠と高木敏雄の往復書簡を取り上げ、その内容を手掛かりとしつつ日本での「民俗学的思考の萌芽」について再検討を行った。両者の往復書簡が認められた時期は柳田國男と南方が活発に書簡をやりとりしていた時期とも丁度重なるものであり、民俗学・説話学の形成過程を多角的に捉え直すことを可能にする資料と言えるが、従来充分に検討が為されてこなかった。加藤氏によれば、南方と高木の往復書簡では様々なト

ピックについて議論が交わされているが、とりわけ高木らが主導して当時行なっていた「民俗学会」の立ち上げに際して、南方が情報提供をおこなった英国民俗学の影響を分析していくことは、学史の整理を進めていく上でも重要な意義があるという。また、南方が自らの文章の主な発表先としていた『ノーツ・エンド・クイアリーズ』誌のコンセプト、問題意識が民俗学のディシプリンの構成に大きな役割を果たすものであったことも、両者の書簡を分析することから明らかになっていったという。今回はこれらの内容を詳しく見ていくと同時に、どういった課題と可能性が両者の書簡に存在するのかを確認された。

三人目のFelt氏は、平安時代に行われた日本紀講筵の記録である『日本書紀私記』と、講筵後の宴席で詠まれた題詠和歌の記録である『日本紀竟宴和歌』を取り上げた。平安時代に於ける『日本書紀』の享受の中で「一書」がどのように扱われているのか、その性質の分析を行い、平安時代に行なわれた日本紀講筵の際には「一書」が「本書」の「注」として扱われていたと結論づけた。この分析結果を踏まえつつ、ジェラール・ジュネット氏（Gérard Genette）の論じるパラテクスト性の立場から、「一書」と「本書」の相互関係を考え直し、『日本書紀』の新しい読み方を提案された。

四人目の発表者の網倉氏は、雑誌『三田文學』（一九一〇年創刊）を取り上げ、水上瀧太郎が雑誌経営にも深く関与して復刊を果たした一九二六年四月から、編集委員を辞退した一九三三年十二月までの時期を中心に、瀧太郎の作品寄稿のみならず時代背景、経営など、多角的な観点から分析を行った。大正末期から昭和初頭の文学界は、既成文学を打破しようとするモダニズム文学とプロレタリア文学の潮流に加えて、純文学と大衆文学の流れが輻輳した時代であった。この中にあって『三田文學』はこれらの流れに加担せず、「只管忠實におのれ一個の道を拓いて進む」（「人眞似」）純文学の立場を貫き、かつ一方で新人登場の場を積極的に提供した意義は大きいと網倉氏は評価した。

五人目の工藤先生は歴史学の立場から、人間と環境の交渉をめぐる問題として「開発（中世ではカイホッと読む）」を取り上げた。人間自らの利用を可能にする為に労働によって自然を変更して行く営為である開発は、実は単に自然そのものを変えるだけではなく、自然に対する「観念」との闘いでもあるとした黒田日出男氏の所論に導かれつつ、中世の諸史料に所見の開発をめぐる言説を通してその観念的側面について研究史を整理しつつ再検討された。すなわち、私利私欲を満たす為の営為である筈の開発を正当化する言説に認められる論理のあり方を明らかにし、またその正当化を担保するものとして「王権」と「仏教」があったことも指摘した。現代に於いては日本文化の特徴、殊に前近代については「自然の共生」といった側面ばかりが取り上げられがちであり、エコナショナリズム的言説が安直に氾濫している。工藤先生はこれに警鐘を鳴らし、人間と自然との関係を改めて厳しく見つめ直すことの必要性を訴えた。

加藤氏は民俗学が専門。工藤先生は日本中世史学が専門ということで、発表者のラインナップからしても学際的な場となったと言えるように思う。会場には専任の先生方、院生、修了生、学部生、更には本学院の高等部の制服まで見受けられ、質疑応答に於けるやりとりも内容的にも充実していた。会の開催時間も実に六時間に及び、発表者としても幹事としても達成感の感じられる会となった。

さて、ここで簡単にこれまでの青山日文院生研究会の活動内容を振り返ってみたい。この会では前期・後期各三回程度の例会と、毎年二回の大会（春季・秋季）を開催。例会では毎回二名の発表者が、研究発表もしくは論文紹介を行ってきた。特に年二回の大会に於いては本学の卒業生の他、非常勤、専任の先生方にも御講演もしくは御発表を行って頂いた。二〇一一年度には山本啓介先生（新潟大学）、大橋直義先生（和歌山大学）、安田尚道先生。二〇一二年度には若松伸哉先生（愛知県立大学）、大上正美先生。二〇一三年度には松本麻子先生（いわき明星大学）、佐伯眞一先生に御登壇に頂き、また第八回例会に於いては廣木一人先生にも御発表頂いた。いずれも院生にとって大変有意義な機会であった。

また毎年、年度初めには《新入生ガイダンス企画》として、本学卒業生で現在古籍商として第一線で活躍されている大谷大先生に書誌学講座をお願いした。参加者全員が一点ずつ古書を手元に置き、実際に手で触れつつ調査の練習をするという贅沢な内容で毎回好評であった。

この他、二〇一三年度春季大会にはハーバード大学の院生のEthan Bushelle氏、第十六回例会にはブリティッシュ・コロンビア大学の院生のAlexey Lushchenko氏、そして先述の通り最終回には本学日本文学科が学術提携を結んでいるコロンビア大学大学院東アジア言語・文化研究科のFelt氏といったように、積極的に海外の大学院生も御招きして御発表頂いた。本研究会が、国際的な研究の場でもあったと言えるだろう。

なお、本研究会への来場者としては本学日本文学・日本語専攻の院生だけでなく学部生や他学科の学生、他大学の院生なども見受けられた。この内、特に学部生も積極的に参加していたことについては強調しておきたい。その内の幾人かは本学大学院に進学している。従来学部生にとって把握しづらかった大学院の様子を紹介する役割も、本研究会は果たして来たと言えるだろう。

研究会の運営については二〇一一年三月二十七日に予定されていた第一回目の立ち上げの大会が東日本大震災の為に中止に追い込まれてしまうなど、困難は多々あったが、御陰様で設立以来の約四年間で通算二十三回開催することができた。内容からしても「参加者が各自の専門の枠を超えて、研究計画、研究成果を発表し合える研究交流の場としての機能を果たしてゆく」という当初の目的を、かなりの程度まで叶えることが出来たと言えるのではないだろうか。御協力下さった皆さまには、改めてこの場を借りて感謝を申し上げたい。そして、今後また何らかの形でこうした院生同士の研究発表、情報交換の場が設けられることを願うばかりである。

（杉山和也）

私の博士論文

博士論文を振り返って

若松　伸哉

二〇〇八年度、私は青山学院大学大学院に博士論文「昭和初期における文学作品と同時代の諸相―小林秀雄と石川淳を中心として―」を提出し、博士号を授与された。

私の場合、それまで約十年に及ぶ研究生活のなかで発表してきた諸論文を、改めて博士論文としてまとめるということになったが、そこで目にしたのは、研究を志した当初の初期の論文と、博士論文をまとめる直前に書いた後期の論文では、研究方法や記述の技術などに大きな差があることだった。もちろんそれは自身の〈成長〉を示すものであり、後期論文の水準に合わせて、初期論文は大きく改稿することになった。

しかし一方で、初期論文のなかに稚拙ながらも盛り込まれた論点は、自身の研究の原初的な問題意識であったことが強く胸に迫った。たしかに後期論文は初期論文に比べて研究の方法・技術がはるかに洗練化されている。しかし、大学院に進学した当初と同じような熱意・真剣さで文学作品に向き合っているのか。そんな問いを初期論文は自身に突き付けてくる。研究を志した当初の論文は、方法・技術が洗練化するとともに自動化している自己の研究の現在をこのように批評的に照らし出す。その意味で私にとっての博士論文とは、これまでの研究活動のなかで自分が歩いてきた道のりの一つの到達点であると同時に、これから進むべき道標ともなっている。

この博士論文が象徴する約十年に及ぶ研究活動の期間は、大切な方々と出会えた期間でもあった。お世話になった先生方をはじめ、先輩や同輩・後輩、研究活動のなかで知り合った友人など、他者との研鑽のなかで成長ができたのはもちろんのこと、こうした周囲の方々の励ましの言葉が、なかなか先の見えない苦しい大学院生活の支えともなった。最後にこの場を借りて感謝の意を表したい。

（愛知県立大学准教授）

日本文学特講A（夏期集中講義）

集中講義を受けて

3C　堂前　清香

今年度の日本文学特講Aでは、日本大学で講師をなさっている鈴木晴彦先生をお迎えして、日本古代書道史の展望を金石文を中心とした文字資料から学んでいきました。

この授業では私たちが今日当たり前のように使っている「文字」が日本でどのようにして伝来、伝播していったのかということを考えていきました。日本での文字のルーツを探るような、普段はあまり考えないテーマを考えるとてもいい機会だったと思います。

日本の書道史は中国から文字が伝来した弥生・古墳時代ごろから始まります。しかし、この当時のもので現在日本に残っている文字資料は大陸に残るものに比べてとてつもなく少なく、その数少ない資料を一つ一つ学んでいくのですが、先生は、実際の資料そのものや刻まれた文字を紙に写し取った「拓本」の本物を示しながらお話を進めて行かれます。例えば、「貨泉」という中国の貨幣に関して説明する際は、これが日本で出土した最も古い文字資料なのだということを説明しながら、実物を出して「ここに文字が刻まれている」という風に示しながら授業を進めていくのです。

この貨泉や鏡などは中国からもたらされたものなのだそうですが、五世紀ごろから徐々に日本の国内でも金石文が刻まれるようになり、有名な稲荷山古墳の鉄剣のようなものもあらわれます。このような資料で面白いと感じたのは江田船山古墳出土大刀銘です。この大刀は、普通に写真を見ただけではおそらく気がつかないのですが、刀の「背」の部分に文字が刻まれています。1センチほどしかない刀の背にびっしりと文字が刻まれているため、本などでは一本丸々載せてしまうと文字が見えなくなってしまうので、切り取られてしまっていますが、プロジェクターで全体図を見せていただいてその大きさに驚きました。しかもこの大刀にはエピソードがあるのです。一部分は読めない文字というのがあるのですが、もともと「獲□□□歯大王」という部分は「蝮宮弥都歯大王」と解読されていました。しかし、稲荷山古墳の鉄剣に「獲加多支歯大王」という部分が見つかり、この大刀も同じく「獲加多支歯大王」と解釈するべきだという風に変わったのだそうです。

そしてさらに時代が下って飛鳥時代になると、仏教が伝来し仏像が日本に入ってきます。その仏像の中には背面に文字が刻まれたものがあるそうです。このような資料を紹介する際には、拓本を机の上に広げて本物の大きさや文字の様子などを伝えて下さいます。この頃の文字はかなりはっきりとした楷書体で、私たちにも読むことができました。また、この時期には石碑が建てられ始めるのですが、その石碑も拓本で紹介していただきました。一文字一文字大きく、しっかりとした楷書体で書かれていて、当時の日本人の技術に驚かされました。

このように弥生時代頃から奈良時代頃までの日本の文字資料を一つ一つ学んでいきましたが、先生は実物を実際に見るということを授業の中で何度も強調しておられ、石碑や仏像の裏に彫られた文字を写しとった「拓本」の実物や、文字の刻まれている貨幣や刀剣など、様々な本物を見て触らせてもらいました。また、遺跡や史跡なども先生が実際に行かれた際に撮った写真や生の感想を交えて説明していただいたので、私たちもその遺跡に実際に行ったかのような深い知識を得ることができました。もう一つ授業の中で強調していたのが、自分で考える、ということでした。日本の古代史はまだまだわからないことが多いですが、様々な文字資料によって色々な可能性を考えることができました。四日間を通じて様々な資料を見て、触って、考えることができ、とても有意義な時間を過すことができました。

二〇一四年度講義題目

〈大学院〉

上代文学研究（一）
漢字文化圏から日本文学史を読み直す　矢嶋　泉

上代文学演習（二）
古典文学研究と古筆研究
「継色紙」を読む　小川　靖彦

中古文学演習（一）
柳田国男研究　土方　洋一

中古文学研究（二）
『源氏物語』の注釈　高田　祐彦

中世文学演習（一）
延慶本『平家物語』を読む　佐伯　眞一

中世文学研究（二）
『梵灯庵返答書』研究　廣木　一人

近世文学研究（一）
黄表紙研究　大屋多詠子

近世文学研究（一）
西鶴以後の浮世草子を読む　畑中　千晶

近世文学演習（二）
都の錦『御前於伽』を読む　篠原　進

近代文学研究（一）
個々の研究テーマの発表　片山　宏行

近代文学演習（二）
横光利一研究　日置　俊次

近代文学演習（三）
戦後の文学批評　佐藤　泉

近代文学研究（三）
谷崎潤一郎研究　山口　政幸

韻文学研究
『御裳濯河歌合』及び『宮河歌合』を読む　西澤　美仁

劇文学研究
能・狂言研究　岩崎　雅彦

日本語学演習（一）
最新文法の方法を学ぶ　近藤　泰弘

日本語学研究（二）
文法論・語用論の研究法　澤田　淳

中国古典学演習
文選詠懐詩精読
阮籍詠懐詩精読　大上　正美

〈学部〉

文学研究法
作品をよむために　矢嶋　泉
文学研究の基礎を学ぶ　高田　祐彦
文学研究の基礎を身につける　土方　洋一
日本文学研究のための基礎知識・能力の養成　廣木　一人

日本文学史
一、上代・中古文学史　矢島　泉
二、中世文学史　佐伯　眞一
三、江戸文学の透視図　篠原　進
四、明治・大正・昭和初頭の文学（主に小説）の概要を把握する　片山　宏行

古典文学概論
ミステリーとパロディー　篠原　進

近代文学概論
短編小説の世界　日置　俊次

漢文学概論
中国古典における韻文と散文の展開について　坂口　三樹

日本語日本文学情報処理法
日本文学・日本語学研究に必要な情報処理の基礎　須永　哲矢

日本語学概論
日本語の仕組みを学習する　近藤　泰弘

日本語史
日本語文法の歴史を考察する　澤田　淳

表象文化研究概論
戦後社会の「表象」　佐藤　泉

日本学入門
「日本学」を通じて日本の言語・文学・文化を考察する　小川　靖彦

文学交流入門
日本文学を「文学交流」の視点から展望する　小川　靖彦

日本文化文学入門
日本文学を専門的に学ぶ外国人が必要とする基本的な日本語・日

本文学・日本社会についての知識を得る　廣木　一人

日本文学演習

『萬葉集』の美とその英訳の研究　小川　靖彦

『古事記』の世界　矢嶋　泉

『源氏物語』賢木巻を精読する　高田　祐彦

『堤中納言物語』を読む　土方　洋一

『枕草子』を読む　津島　知明

『金葉和歌集』精読　西澤　美仁

『新古今和歌集』研究　廣木　一人

『平家物語』を読む　佐伯　眞一

『建礼門院右京大夫集』を読む　平藤　幸

『徒然草』を読む　佐藤　智広

西鶴の〈ふしぎ〉を考える　篠原　進

黄表紙『江戸生艶気樺焼』（えどうまれうわきのかばやき）を読む　大屋多詠子

黄表紙『御存商売物』（ごぞんじのしょうばいもの）を読む　山名　順子

『御伽百物語』を読む　藤川　雅恵

『雨月物語』を読む　井上　泰至

芥川龍之介の人と作品について考察する　片山　宏行

現代短歌の研究と実作　日置　俊次

文学論争を通して時代と文学の関係を理解する　佐藤　泉

島崎藤村『家』を読む　市川　浩昭

長編小説の構造・力学を考える―『1Q84』と『砂の器』　山口　政幸

小説テクスト分析　浅野　麗

翻訳演習

日本文学や日本文化の英訳と日本語言文との比較検証及び再翻訳　緑川眞知子

中国古典文学演習

『世説新語』を読む　李　満紅

中国文学・思想演習

『文心雕龍』を読む　和久　希

文学交流演習

『源氏物語』における『白氏文集』への受容考察　西野入篤男

海外における日本古典文学の受容考察

日本語学演習

コンピュータによる文法研究　金子　馨

日本語学研究の方法論について学ぶ　近藤　泰弘

語用論の観点から日本語表現を分析する　澤田　淳

日本語の語彙的な側面に対する研究分析　土屋　智行

地理的・社会的観点から日本語について考える　鑓水　兼貴

日本文学講読

『伊勢物語』を読む　土方　洋一

古典で読み解く中世の鎌倉　佐藤　智広

文学の近代・演劇の近代　市川　浩昭

中国古典文学講読

『論語』を読む　樋口　泰裕

日本語学講読

日本語の語の構造と分類、語彙について概観する　奥田　芳和

書道の歴史と実技

書道史・指導法の知識と書道の基礎技術修得　渡邊　貴彦

書の基礎知識及び技術を身につける　金子　馨

書理論

書文化の歴史観・思想と理念　笠嶋　忠幸

日本語教育概論

日本語教育の概論と日本語指導における基礎的な知識と指導法についての理解を深める　中川千恵子

日本語教授法

日本語初級教材のシラバス分析と模擬授業を通して、初級の学習項目の把握と指導法の理解、基本的な教授能力を習得する　川端　芳子

特別演習（卒業論文）

『萬葉集』および書物学の研究方

法　小川　靖彦
上代文学に関する諸問題　矢嶋　泉
平安文学、その他　土方　洋一
卒業論文作成指導　高田　祐彦
卒業論文作成指導　佐伯　眞一
中世・近世韻文学　廣木　一人
主に近世文学　篠原　進
近世後期文学　大屋多詠子
物故した作家及びその作品についての卒業論文作成指導　片山　宏行
卒業論文作成指導　日置　俊次
近代以降の文学、文化、思想をテーマとする卒業論文の作成　佐藤　泉
日本語学の卒業論文の書き方　近藤　泰弘
日本語研究に関連する卒論指導　澤田　淳
日本語教育及び日本語等関連分野の研究　山下　喜代

日本語教育演習

日本語教育初級教材及び初級授業の作成と研究
日本語教育初中級教材の具体的な指導方法を考える　川端　芳子

日本文学特講

『古事記』と『日本書紀』　矢嶋　泉
『古今和歌集』の表現　高田　祐彦
平安京と怪異の表象　土方　洋一
連歌・連歌師とは何であったか　廣木　一人
『平家物語』の展開　佐伯　眞一
ベストセラー研究　篠原　進
『南総里見八犬伝』の動物　大屋多詠子
黄表紙・滑稽本研究　山名　順子
「話の屑籠」から戦時下の文学と世相を考察する　片山　宏行
国語教科書の戦後史　佐藤　泉
横光利一研究―短編小説の世界―　日置　俊次

文学交流特講

日本の古典詩歌の翻訳と受容
古代人の自然観・宗教観　小川　靖彦

日本文学とアジア

江戸時代における日本文学とアジア　大屋多詠子

日本文学とヨーロッパ・アメリカ

西欧における日本文学の受容　畑中　千晶

表象文化論

能・狂言に見る男女の表象　佐伯　眞一
黒田如水の表象について考える
大衆文学の表象について考える　原　卓史
ファッションと映画で見る現代文化
007シリーズから見た現代文化　助川幸逸郎

日本文学特講（集中講義）A

日本書道史と漢字・漢文の変遷　鈴木　晴彦

中国文学・思想特講

三国魏の文学　大上　正美

中国古典文学特講

杜詩を読む　樋口　泰裕

日本語学特講

コーパスに基づいた日本語文法研究　近藤　泰弘
日本語と外国語との比較対照研究　澤田　淳
日本語の変異について考える　鑓水　兼貴

日本語教育実習

効率のよい、明解な日本語教育とは何かを実習を通して理解する　三原　裕子

日本文学研究のための英語

日本文学を専攻する学生が、英語で書かれた日本文学・文化論を正確に理解し、自ら英語で発信する能力を養成する　福田　武史

音声表現法

思っていることをわかりやすく、的確に表現する方法について　坂本　充

文章表現法

基本的な文章技術の向上を目指す　木村　寛子

〈研究室だより〉

☆二〇一四年三月の日本文学科学部卒業生は一六五名、九月の卒業生は一名、また四月入学生は一一五名でした。大学院前期課程三月修了生は五名、四月入学者は四名、後期課程の四月入学者は一名でした。

☆二〇一四年度から新たに非常勤講師として、飯田道子、大久保雅子、奥田芳和、鈴木晴彦、高橋雅子、土田久美子、永野浩美、西野入篤夫、緑川眞知子、和久希、鑓水兼貫の諸先生方にご尽力いただいています。

☆二〇一四年度は、高田祐彦教授が学科主任を務めました。

☆二〇一四年度は山下喜代教授が内地留学（早稲田大学社会科学総合学術院）のため休講なさいました。

☆二〇一四度日本文学会大会・講演会・総会が六月二十八日に青山キャンパス、四号館四二〇教室で開催されました。講演会については本会報四頁をご覧下さい。

☆二〇一四年十二月六日　本多記念国際会議場において第一五〇回直木賞を受賞された作家の姫野カオルコさんをお招きしてエバーグリーン募金イベント、講演会「無益の効能―小説家の日常」が開催されました。姫野カオルコさんは、これまで四回も直木賞候補にノミネートされた実力派。ついに快挙達成です。

〈編集後記〉

会報のいいところと言えば、やはり普段はあまり聞けないような話に出会えることです。貴重な先輩方のお話、留学生の記事は皆さんにとってもいい刺激になるのではないでしょうか。今年の日文大会はドラマ特有の方言がテーマの講演で、今回の記事を読むことでまた新たに興味が湧いてきました。言語学も中々奥が深くて面白いですよね。日常生活と研究というのは離れた別個の存在ではなく、実は密接に関わりあっていてそこが面白いのだなと改めて感じました。卒業論文のテーマはまだ決まっていませんが、楽しく研究できるように普段から色々とアンテナを張っておこうと思います。

また、今回より新たに研究室探訪という企画が登場しました。当初予定していたものが中止となり急遽決まった企画ですが、なかなか面白くできたのではないかと思っています。扉の前まで来たものの、結局開けずに帰った…そんな方に是非読んでみて欲しいです。取材に行った私自身、研究室に入ったことはほとんどないのでとてもいい経験となりました。先生によって研究室の様子や本の置き方、種類など色々な違いがあり、比較してみるととても面白いですよ。個人的に入ってみたい研究室がいくつかあるので私としてはこの企画がもう少し続けばいいなと思っています。

来年度からは日文大会の形式も少しづつ変わっていく予定です。学生にとって魅力的な大会になるよう頑張っていくので是非積極的に参加していただけると嬉しいです。一・二年生だけでなく三・四年生を含めた全日文生が繋がりを持つことができればと思っています。

最後に、編集の過程で様々な困難がありましたが、こうして発行することができて安心しています。会報の作成に協力してくださった皆様に感謝いたします。

学生委員委員長　石原　玲奈

編集委員

教員
片山　宏行　土方　洋一

学生三年生
浅沼　建太　石橋　迪子
糸永　晴子　今井　悠有
岩本　悠里　鵜飼　薫子
梅澤　朋代　小幡　奈月
杉山真里亜　根間　才弥
野間麻衣子

学生二年生
石原　玲奈　加古真理奈
清水　咲　高見　勇樹

学生一年生
安達　萌音　天木　優士
熊川　結子　坂本　七海
関能　礼　高井　美紀
永本　壮一　橋谷眞生子
本堂　優也　松島　優生
山田　七海　矢野くるみ

会報　第四十九号

二〇一五年三月一九日　発行
〒150-8366　渋谷区渋谷四―四―二五
青山学院大学総研ビル10F
日本文学科研究室内
編集　青山学院大学日本文学会
電話（〇三）三四〇九―七九一七
FAX（〇三）三四〇九―八〇〇五